

水稻種子の取扱いについて

種子予措の際は、低温条件下での浸種は避け、次の点に十分留意しながら行ってください。また、裏面の「種子のご利用にあたっての注意点」も参考にし、品種の特性を把握したうえで作業を行ってください。

① 浸種のポイント水温の確保と水の交換!



【良い例】

- ・種子消毒、浸種は必ず屋内で行い、開始時にお湯で水温が15℃になるように調整する。また、水温10~15℃を確保できるように消毒、浸種の開始は早くとも4月上旬からとする。
- ・複数の品種、消毒方法の異なる種子を同じ容器で浸種、催芽しない。
- ・浸種の水量は種子1kg当たり3.5L(50kg当たり175L)とする。
- ・浸種期間は水温10℃で6日間程度とし、水交換は2~3回とする。薬剤吹付・塗沫種子では浸種開始後2日間は水を交換しない。



② 催芽のポイント 湯通しは確実に!

催芽は、36~40℃のお湯で湯通しをおこない、種子袋の内部まで均一な温度になるようにする。その後30~32℃で催芽する。また、催芽中は水分を切らさないように注意する。



③ 苗立枯病防除は確実に!

- ・育苗期間中は温度管理に注意し、昼間30℃以上、夜間10℃以下にならないようにする。
- ・育苗期間中は、高温・多湿にならないようにする。



◎ 種子消毒剤の薬害等の注意

○ヘルシード乳剤

- ・軽度の初期生育遅延を認めることがあるが、その後回復するので通常の管理を維持してください。

○テクリードCフロアブル

- ・軽度の初期生育遅延を認めることがあるが、その後回復するので通常の管理を維持してください。ただし、極端に播種時の覆土が少ない場合には、初期生育遅延（発芽抑制、根の伸長抑制など）が強くなる恐れがあるので覆土は適正に行ってください。
- ・10℃以下の極端な低温での浸種は、催芽や出芽が遅延、抑制される場合があります。

○消毒剤吹付け・塗沫済み種子は、無消毒種子と区別するため着色剤を使用しております。

着色剤：ウォーターブルー

各種子場により着色剤の濃淡の差が見られる場合がありますが、色の濃淡によって薬剤の付着量に差がでることはありません。

種子のご利用にあたっての注意点

品種の特性に応じて浸種から催芽までの作業を次の表を参考に今一度確認しましょう。

田植予定日から逆算した作業スケジュール(中苗35日育苗とした場合の例)

田植日逆算日数	-43日 ~ -37日	-36日	-35日 (35日間)	0日		
作業	浸種		催芽	播種	育苗	田植
温度管理等	水温 10~15℃		30~32℃	苗の生育状況に応じて適宜行う		
作業の注意点	<ul style="list-style-type: none"> 14℃で8日間以上行くと発芽することがある。 10℃以下だと休眠が深まる場合あり。 		<ul style="list-style-type: none"> モミ袋の中まで温度が均一になるよう36~40℃の湯通ししてから行う。 バラつき防止のため約8時間毎に袋を反転させる。 伸びすぎないように観察しながら行う 	<ul style="list-style-type: none"> 播種量を確認しながら行う。 育苗期間は約35~40日程度 田植は好天日に行う。 		
おもな品種別目安	10℃	14℃	催芽時間の目安	播種量(中苗)	左記の時間等は目安であることに留意し、籾を十分に観察しながら適宜行ってください。	
あきたこまちR	6~8日	6日程度	20時間~	100g/箱		
ひとめぼれ	あきたこまちR並		あきたこまちR並	100g/箱		
めんこいな	"		"	100g/箱		
酒米(美山錦など)	"		"	120g/箱		
たつこもち	"		"	100g/箱		
秋田63号	長め		長め	120g/箱		

○浸種期間中、気温が氷点下になることがあるので水温管理には十分注意してください。

気象予報を参考にし、温度を適宜測定しながら適正範囲になるよう調整して行ってください。

